

## 教育目標

高度な専門知識と技術並びに幅広い視野と豊かな人間性をもった明日の和歌山県の農業を担う人材の育成

## 今年度の重点目標

- 1 学生の確保
- 2 教育活動の充実・強化
- 3 進路支援の強化
- 4 情報発信の充実

## 評価基準

- 【評価区分・5段階】
- 5:当初目標を十分達成した(101%以上)
  - 4:当初目標をほぼ達成した(81~100%)
  - 3:当初目標を概ね達成した(61~80%)
  - 2:当初目標の半分程度達成した(41~60%)
  - 1:当初目標をほとんど達成できなかった(40%以下)

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組と評価	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
1 学生の確保	○平成以降入学者の定員割れが続いている。 ○直近5年は年平均20名と低迷(受験者数23名) 定員40名 ↓ 実績:20.6名 (H29~R3平均) 出身高校の属性(H29~R3) 農業39%、総合14%、 普通36%、商工業11% ○県外からの入学生は増加 直近5年は毎年県外からの学生が入学 年平均3.6名。 (県内外の属性(H29~R3)) 県内86%、県外14% ○アグリビジネス学科 (H29新設)の入学者も低迷 定員10名 ↓ R3年度2名 (H29:8名、H30:5名、 R1:0名、R2:4名)	【令和3年度入学生:32名確保】 園芸学科:24名 アグリビジネス学科:8名	《取組》 ○高校へのアプローチ ○オープンキャンパスの開催 ○出前授業、ガイダンスの実施 《評価》 ○目標の6割の学生を確保 令和3年度入学生20名 園芸学科:18名 アグリビジネス学科:2名 (入学生の属性) 出身校:農業50% 総合10% 普通30% その他10% 県内外:県内82% 県外18% 《参考》 応募者:21名(推薦11名、一般前期9名、一般後期1名)	3	引き続き実施	3	出前授業やオープンキャンパスの開催など幅広く、積極的に取り組んでいる。 コロナの影響で、学校訪問など活動範囲が縮小され、入学生が増えなかったのは残念な結果となった。 一方、校内の感染対策と学生への注意喚起は徹底できており、一人の感染者も出なかった。 受講時間を減らすことなく、通年授業できたことは評価できる。 次年度も、感染対策の徹底と学生への予防啓発は続けていただきたい。
	○高校へのアプローチ ・学校訪問 ・資料送付 ・高校職員の関係会議でPR 高校訪問 6月、9月、11月 延べ83校(県内75校 県外8校) 学校パンフレット、農学部紹介チラシ、オープンキャンパス案内を持参 園芸学科、アグリビジネス学科それぞれの特徴を巡回説明 ・募集要項、学校案内等の送付(4月) 募集要項 学校案内 県内 50校 211部 255部 県外303校 330部 344部 計 541部 599部 ・教育関係首長会への出席、農大概要説明(校長、副校長) 教頭会議(Web) 5月13日 募集要項120部を配布 進路指導部長会議(Web) 5月14日 副校長説明 進路指導研究会等 7月12日 //	《取組》 ○学校紹介と学生募集活動の展開 ・受験者数の確保 36名以上(入学生/受験生=約9割) ・学校訪問巡回数 3巡 ↓ 高校訪問 6月、9月、11月 延べ83校(県内75校 県外8校) 学校パンフレット、農学部紹介チラシ、オープンキャンパス案内を持参 園芸学科、アグリビジネス学科それぞれの特徴を巡回説明 ・募集要項、学校案内等の送付(4月) 募集要項 学校案内 県内 50校 211部 255部 県外303校 330部 344部 計 541部 599部 ・教育関係首長会への出席、農大概要説明(校長、副校長) 教頭会議(Web) 5月13日 募集要項120部を配布 進路指導部長会議(Web) 5月14日 副校長説明 進路指導研究会等 7月12日 //	4	増加傾向にある非農家出身の受験生は、卒業後の就職状況に関心が高い。 本校の多彩な就職先や高い就職率(過去3か年100%)を強調しつつ、引き続き巡回説明をおこなう。	4	高等学校へのアプローチは積極的におこなえている。 農林大学校では、就職希望生が増えていることから、高校訪問では卒業後の就職率や就職先のPRを強調していけばよい。	
	○オープンキャンパス 5回 ・夏は高校3年生、 ・春は1、2年生をターゲット	《取組》 ○チラシ配布やHPなどにより事前告知を強化。 ○7、8月に3回開催(7/22 7名 8/3 3名 8/10 9名) ○3月に2回実施(3/9、3/25) ○参加者に「入試想定問題」を配布するとともに、職員からスマート農業、GAP演習の取組みを、学生から農大生活等を紹介 《評価》 ○7、8月に参加した20名のうち12名(6割)が受験。 オープンキャンパス参加者を増やすことが学生確保につながる。	4	リモート開催の対応も整え、引き続き実施	4	オープンキャンパス参加生徒の受験率は高く、学生確保の成果につながっている。 学校説明では、スマート農業やGAPの取組、加工品開発販売をアピールすると高校生の関心は高まると思う。	
	○出前授業、ガイダンス実施の働きかけ	《取組》 ○教育委員会との連携による高校訪問の実施 事前に学校教育課長から県内全高校へ協力依頼文を发出のうえ、集中訪問を実施。 ○出前授業の実施 ・本校職員が高校からの依頼内容に基づき 高校での授業を実施(2校320名) 「和歌山県の農業」 「農業の魅力と農林大学校」 「就農支援制度」等 ○県内農業系4高校との連携強化 ・「高大連携プロジェクト」(R3新規事業)の推進 農業系4高校(紀北農芸、有田中央、南部、熊野)と農林大学校が専門的な授業等で連携することにより、5年一貫の教育システムを構築する事業 ▶ 県立学校教育課から研修職員を受入れ、専攻実習や農業経営、概論などの講義内容を把握(5~3月) ▶ 一貫教育に対応した高校カリキュラムの再編強化 ・プロジェクト研究を発表紹介(12/17:有田中央高校がリモート参加) 《評価》 ○オープンキャンパス直前の巡回により、キャンパス参加生徒を獲得 ○出前授業は6校、生徒360名を対象に9回実施。 ○農業系4校において農大カリキュラム「概論」「農業経営」に値するカリキュラムを強化→評定5の生徒(特待生)は上記2科目免除を検討中(R7~入学生を想定)	3	本校職員が高校生へ直接PR説明するのは効果的である。 高校への出前授業を積極的におこない、引き続き実施	4	出前授業で、ドローンやラジコン草刈機等の動画風景を使えば、生徒のイメージも湧きやすく、関心が高まると考える。 「高大連携プロジェクト」は農業版高専であり、全国でも新たな取組となる。農業系高校との連携を密に、今後の展開を期待する。	
	○アグリビジネス学科のPR強化	《取組》 ○農学部パンフレットをリニューアル 学校訪問時に、アグリビジネス学科の特色をPR (1年次は専攻実習など園芸学科と差異がないことを強調) 《評価》 ○昨年度、アグリビジネス学科はマーケティング、加工品開発の専門学科と誤認を与えるケースがあったことからパンフレットをリニューアルし、詳細説明をおこなった。 ○R4年度アグリビジネス学科入学生3名(R3:2名)	3	引き続き実施	3	パンフレットのリニューアルは評価できる。 アグリビジネスは分野が広くて難しいイメージを持たれやすい。 少人数制の特色を生かし、学生は自ら企画立案し実践できることをPRしてもよいと思う。	

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組と評価	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
2 教育活動の充実強化	<p>○スマート農業の振興など農業を取り巻く情勢は刻々と変化</p> <p>○一方、本校学生の属性も多様化</p> <p>・学生の属性 (H29～R3)            専業農家 20%、            兼業農家 24%、            非農家 56%            (H24～H28)            専業農家 29%、            兼業農家 27%、            非農家 44%</p> <p>・出身高校 (H29～R3)            農業39%、 総合14%、            普通36%、 商工業11%</p> <p>○学生間に基礎学力の開きがある。</p> <p>○資格取得率 (H28～R2実績)            ・園芸技術:60%            ・農業技術検定2級:15%            ・農業簿記3級:42%            ・狩猟免許(わな猟):76%            ・危険物乙四:11%            ・毒劇物:4%</p>	○時代の流れに即した授業の実践 ・授業科目の新設、拡充	<p>《取組》 【新設】 ○スマート農業機械演習《2年 後期:20時限》 H30～R2で導入した農業散布ドローン、リモコン草刈機、スピードスレーヤー等を用いた超省力栽培技術等の実践教育を実施</p> <p>【拡充】 ○GAP(農業生産工程管理)の実践教育《2年 48時限》 国庫事業を活用し、令和2年度「柿」のG-G.A.P.の継続認証と3年度「トマト」で新規認証を目指す。 GAP演習を通じて、認証取得に向けた実践教育を実施する。 ○起業演習《2年アグリビジネス学科 45時限》 (「店舗運営演習」を改編)</p> <p>《評価》 ○スマート農業機械の構造と取扱い等を習得 ○11/10 柿、トマトでG-G.A.P.を認証取得 ○店舗運営に限らず、起業や組織運営等に学習領域を広げた授業を実施</p>	4	<p>授業科目は変更せず継続</p> <p>スマート農機演習を前期に変更し、学生の操作技術等を早期に習得させる。 →専攻実習で機材の活用を高めることで、実践力を強化する。</p>	4	<p>スマート農業は全国でも始まったばかり、農林大学校でいち早く授業に導入していることは高評価。 農業界でも注目されている分野なので、学生のスキルアップに尽力してほしい。 GAPの取組は全国の農業大学校でも広がっており、農林大学校でのG-G.A.P.認証取得は学生にとってレベルの高い演習教材となっている。 学校PRにも繋がる内容なので、これからも計画的に進めていただきたい。</p>
		○資格取得率向上を目指した取組	<p>《取組》 【授業時間の拡充、組換え】 ○園芸技術、農業技術検定 ・自習時間の新設(希望生→全学生)《2年 16時限》 ・資格試験直前の集中講義を編成(「資格取得対策」の新設) ・模擬試験の実施(2回) ○農業簿記検定 ・《2年 15時限》→《2年 21時限》 ・模擬試験の実施(2回) ○危険物・毒劇物 ・外部講師を招聘(R1～) ・1年次不合格者に対して2年次の再チャレンジ(R2～) ・職員による補習授業の実施(R2～)</p> <p>《評価》 ○R3資格取得率(R2)            園芸技術:68%(64%) 農業技術検定2級:28%(0%)            農業簿記3級:50%(20%) 狩猟免許(わな猟):89%(73%)            危険物:24%(3%) 毒劇物:0%(3%)            ※5つの資格試験で合格率が向上            ※毒劇物は合格者0 → R4は過去問題を徹底解説し、個別指導の強化で対応</p>	4	<p>「資格取得対策」(試験直前の集中講義)の新設により合格率が向上した。 次年度も引き続き実施</p>	4	<p>試験前の集中講義を新設し、資格取得率を向上させたことは良い判断。今後も、熱意ある職員の指導を期待する。</p>
		○魅力ある教育の実践(その1) ・スマート農業関連技術の導入	<p>《取組》 ○ICT機器をミニトマト、メロン、バラロックウールハウスへ設置(R1) ○制御ノード設置によりハウス環境制御装置の一括管理が可(R2) ○外気象ノード設置により、天候に順応した自動環境制御を実現(R2) ○自動環境制御が可能となった3ハウスをケーブル接続し、クラウド連携によるスマートフォンでの一括管理を実現(R2) ○イチゴ高設栽培ハウスへ環境制御装置を導入(R3) ○自動環境制御を活用した「ミニトマト」増収栽培技術の習得をプロジェクト学習で、「ガーベラ」の高品質生産技術の習得を専攻実習を通じて実践(R3～)</p> <p>《評価》 ○2年生の卒業論文(エンドウ・イチゴ)の施設管理データ収集分析および野菜コースのプロジェクトとしてミニトマトの増産技術実証に活用。 ○次年度はさらなる増収に向けた栽培管理についてプロジェクト研究を行っていく。</p>	4	<p>ICT技術の実証 プロジェクト課題、 卒業論文研究に活用</p> <p>スマート機材の実践活用 ・スマート農機演習を前期へ移行(ドローン、ラジコン草刈機、スピードスプレーヤー等)【再掲】 ・専攻実習でスマート農機を活用し学生の実践力を高める【再掲】</p>	4	<p>スマート農業の機械演習やICTの活用事例をうまく連結させ、農業の先端教育をおこなっていることをアピールしてください。</p>
		○魅力ある教育の実践(その2) ・GAPの取組を加速化	<p>《取組》 ○GAP演習の授業導入【再掲】 国庫事業を活用し、コンサルティング会社から外部講師を招聘しG-G.A.P.認証取得に必要な知識、技術を習得させる。 ○G-G.A.P.「カキ」の継続認証、「トマト」の新規認証を目指す。 ○G-G.A.P.に対応した機材を導入する。</p> <p>《評価》 ○11/10 付カキで継続、トマトで新規のG-G.A.P.認証を取得 ○GAP柿として香港イオンへ輸出版売を実施(180Kg:1,800円/2コ)</p>	4	<p>国庫事業を活用し、生産工程管理の認証取得を目指す。 ・GLOBAL.G.A.P.(果樹、野菜)【継続】 カキ、トマトの継続認証 ・MPS-ABC認証取得(花き)【新規】 花きの全ほ場において環境負荷の少ない栽培を実践 ↓ 果樹・野菜・花き全コースでGAP農業の取組みを強化</p> <p>柿の輸出版売は継続実施</p>	5	<p>G-G.A.P.で柿の継続認証とトマトの新規認証取得の取組は大変良い。 次年度は、花きでMPS-ABC認証取得を目指すことも計画的である。 MPSの認知度は低いと思うので、農林大学校のPRなど対外向けの説明は工夫してください。</p>
○魅力ある教育の実践(その3) ・模擬会社の設立、学生運営	<p>《取組》 ○「店舗運営演習」(R2)を「起業演習」(R3)に改編し、起業から組織運営についての知識を習得 ○模擬会社を10月に設立(「法人設立届を県、町、国(税務署)へ提出」 学生が会社員となり、代表生が役員に就任、生産から仕入れ、販売までの運営を自らこなう。</p> <p>《評価》 ○全校アンケートにより社名を「わかやま農大学生会社」とし、事業内容・代表社員を決定(1月)</p>	4	<p>全学生が経営者となる合同会社形式で6月(専攻コース決定時)の設立を目指す</p>	4	<p>「わかやま農大学生会社」の設立はアグリビジネス学科の存在性を高める。 起業や会社運営は学ぶ内容も多く、4年生大学でも導入は難しいので、計画性をもって授業展開してほしい。</p>		

本年度の重点目標	現状と課題	具体的方策・評価指標等	本年度の取組と評価	内部評価	次年度以降の課題と取組	外部評価	外部評価者コメント
3 進路支援の強化	<p>○非農家出身の学生が増え就職に関する指導や就職先の開拓などきめ細やかな対応が必要 加えて学生の多様化により卒業後の進路や学校生活に不安を感じる者が現れる傾向がある。</p> <p>○就職試験の時期が早まっていることから、学生の就職活動は1年生後半には準備を始める必要がある。</p> <p>○1年生における就業意識はまだ低く、早期から積極的に活動する学生は一部である。</p> <p>○卒業時の進路確定率 97% (H28～R2)</p>	<p>○将来設計能力の養成 ・授業科目の変更 ・インターンシップ研修時期の改善</p>	<p>《取組》 ○進路支援強化に向けた授業の再編 ・キャリアデザイン授業(1年生)の導入 学生が主体的に、人生と職業、キャリアプランを思索するため専門外部講師と職員連携による授業を実施</p> <p>《評価》 ○進路選択に向けた意識の醸成 ○キャリアデザイン授業で一部の内容を就職、就農希望者に分けて実施したことで、卒業後に向けた準備を具体的に進めることができた。</p>	4	就職、就農に分けたカリキュラムを実施(キャリアデザイン) 就農予定者には卒業後の営農モデルを設計させ、経営展開の計画性を高める。	4	インターンシップ研修は就職活動の動機づけにもなる。キャリアデザインは学生就職率の高さからも成果はでている。引き続き実施してください。
		<p>○ハローワークとの連携強化</p> <p>○個別面談による進路指導 ○求職情報の常時提供</p>	<p>《取組》 ○ハローワーク(HW)からの講師派遣 ・求人票から見る就労条件のポイント ・就職面談に有利なエントリーシートの作成 ・HW職員による模擬面接の実施</p> <p>○個別面談の実施(進路指導職員、担任との2者面談) 【1年生】5～6月:進路状況調査・二者面談 9月:三者面談 1月:HW講師による模擬面接</p> <p>【2年生】4月:就職活動動向調査 4～7月:二者面談、進路指導、HW講師による模擬面接の実施 7月:非内定者への就職支援、二者面談の実施</p> <p>《評価》 ○2年生18名全員が進路確定。 ○ハローワーク、進路指導職員、担任による模擬面接をおこなうことで、就職活動のスキルアップにつながった。 ○理由が明確でない退学生が4名出た。(8～9月) →学校生活や授業カリキュラム等について、学生アンケート調査を実施(10月、2月) →特に注意すべき記述は無かった。</p>	3	進路指導は、保護者との連携を密に学生の学力向上と進路意識の醸成を双方から指導支援する。新規参入希望生へは「新規就農受入協議会」との連携を密に図り、県内の就農定着を支援する。	3	自主退学生が複数出たことは残念な結果となった。コロナの影響はなかったとの見解だが、今後も学校イベントの中止など想定される。代替授業を柔軟におこなうなど、学生にとって学校生活の楽しみが減らないよう工夫してください。退学生が出たことを踏まえ、学生へのアンケート調査を実施したことは良い判断(学生の授業評価は4年生大学ですすでに実施している)。学校側の問題は見出せなかったが、今後の取組む参考となる。次年度以降も引き続き実施してください。
		<p>○学校と専門カウンセラー、保護者3者による伴走型支援の実施</p>	<p>《取組》 ○本校1年生を対象に、紀北農芸高校との協同開催として企画(3/7)。JA、農業法人、農業関連企業等を招請し、学生の進路決定の一助とする。</p> <p>○ガイダンスを機に、学生自らが企業担当者へ直接コンタクトをとり、自己PRをおこなうことで、就職活動の優位性を高める。</p> <p>《評価》 ○R3ガイダンス(3/7)はコロナで中止 →参加予定企業の概要説明、面接試験対策に変更 →企業店舗運営演習を実施 ○R2ガイダンスを介して参加企業への2年生就職決定率は6割</p>	3	学校生活や卒業後の進路に、不安を感じる学生が、入学後に現れる傾向がある。 5月にアンケート調査をおこない、悩みがちな学生には、保護者とカウンセラーと連携しながら、早期サポートをおこなう。	3	就職ガイダンスでは、参加企業への就職率が高かったことから成果はあったと判断できる。学生の就職活動への意識高揚にも繋がるので、引き続き実施してください。
		<p>○就職ガイダンスの開催 対象:1年生 時期:3月</p> <p>○ガイダンスを通じた早期就職活動の実施</p>	<p>《取組》 ○ホームページによる農林大学校の魅力発信</p> <p>《評価》 ○県ホームページ更新33回 入学試験、和農市、オープンキャンパス等を情報発信 ○ブログ掲載 53回 日常の学生活動、学校生活をタイムリーに発信することで本校の魅力をPRできた。(約2,000アクセス/月)</p>	4	引き続き実施	4	これからも、きめ細かな情報を随時、発信してください。
4 情報発信の充実	<p>○農林大学校が一般に十分認識されていない</p> <p>○マスメディア等を通じた情報発信</p> <p>○地域における効果的な情報発信関係機関(市町、JAなど)や地元民間企業(JR、スーパー等)を通じた和農林大情報の発信</p>	<p>《取組》 ○ホームページを県へ移行することで、県立学校である旨を強調し、検索エンジンの上位性を高める(R1～) ○農大ブログと併せて、きめ細かな情報を発信 情報発信数25回</p> <p>《評価》 ○県ホームページ更新33回 入学試験、和農市、オープンキャンパス等を情報発信 ○ブログ掲載 53回 日常の学生活動、学校生活をタイムリーに発信することで本校の魅力をPRできた。(約2,000アクセス/月)</p>	4	引き続き実施	4	これからも、きめ細かな情報を随時、発信してください。	
		<p>《取組》 ○プレスリリース回数 11回 ○ブログ更新 53回 ○広報誌 10回</p> <p>《評価》 ○ラジオ4回の露出(和歌山放送:9/1,9/9,9/17,10/21) ○テレビ放映7回(NHK和歌山2回、テレビ和歌山5回) GAP認証、学生募集、卒業式等 ○新聞掲載回数:12紙、24件</p>	4	マスコミ等へ積極的に働きかけ、引き続き実施	4	農林大学校のニュース記事はテレビや新聞等でよく目にする。一般の方は学校を訪れる機会が少ないので、マスメディアを通じた周知効果は高い。これからも積極的にPRしてください。	
		<p>《取組》 ○市町(経営支援課協力)、JA等関係機関に対して広報誌やホームページへの記事掲載とポスター掲示を要請 ○民間企業へポスター掲示を要請</p> <p>《評価》 ○市町、JA等の機関広報誌:10回 ○ポスター掲示121カ所 市町18 JA8 民間企業等 95</p>	3	引き続き実施	3	農林大学校のポスターは地元スーパーなどでよく見かける。地元からのPRは学生募集の第一歩。地域との連携をさらに深め県域で認知度を高め、県民から愛される学校となってください。	